

# 市民記者が行く!

市民が池田市の魅力をレポートする  
“市民記者”として、地元・池田の  
情報を発信します。

今月の市民記者  
米津 榮次郎さん



広報誌で池田を伝えて今年で18年目。「何か社会に恩返しできたら」と話す、御歳90歳。気候変動に資する適切な情報普及の経験を生かし、脱炭素社会の実現に向けた活動を牽引するのがライフワーク。

取材先

同志社大学2年 大内美里沙さん

## 空手道を極めシニア世界一に挑む!

中国拳法が沖縄で発達し日本全土から世界に広まった空手。素手で突き・受け・蹴りの3方法を基本とします。その空手で世界一に挑む真摯な新成人アスリートを紹介します。

### 本市出身の大内美里沙さん

4歳から空手を始め、関西学院初等中学部を経て空手強豪の山梨県日本航空高校で寮生活を送りました。中学3年でナショナルチームに入り、高校1年でも初めて日本一に輝きます。その後インターハイ2連覇、国体優勝、ジュニアアジア大会4連覇、ジュニア世界大会優勝を経て、2022天皇杯皇后杯全日本空手道選手権大会では準優勝の快挙。今は同志社大学生としてシニア世界一をめざし練習の毎日を送っています。

祖父が空手の先生だった影響もあり、物心がつく頃には空手着を着ていたといえます。中国拳法が沖縄で発達し日本全土から世界に広まった空手。素手で突き・受け・蹴りの3方法を基本とします。その空手で世界一に挑む真摯な新成人アスリートを紹介します。

### 敗北から自身を見つめ直して

選手歴を垣間見る限り順風満帆に見えますが、実はそうではありません。昨夏の全日本学生大会で予期しない敗北を喫し、初めての挫折を経験。「高校のときに日本一を取り、自分の中の形の得意分野に自信を持ち過ぎました。それまでは周りのアドバイスをあまり取り入れず、自分のやり方が自分に合っていると突き通してきました。ここで少し空手を休み、原因が何かを考えたときに、自分の考えた形の過信が敗因だと気付いて形を変えることを決意しました。でも国体も次の試合もなく、すぐに立ち直れず練習にも身が入らない毎日が続きました。そんなときに幸運にも全日本空手道連盟の出場推薦をいただき、これで這い上がってみせると胸に決め猛練習に励むようになりました。

### さらなる高みをめざして

大舞台で自分の弱さを痛感した大内美里沙さんはさらに自身を鼓舞します。「結果を残せたのは事実ですが、それはただの結果に過ぎません。私の技術はまだまだで人間力や精神力など、課題はたくさんあります。世界一になるにはほど遠く、乗り越えねばならない壁もたくさんあります。結果はもう過去のものと捉え、私のめざすべき形を求め、これから世界一に挑んでいくのみです」と情熱を燃やし続けています。



市民の皆さんへのメッセージを聞きました。

「コロナウイルスがはやる中で行動範囲も限られ息の詰まる毎日ですが、いつか終わるものと信じて希望を持って耐え抜きましょう! どのスポーツも試合がなくなり、目標を掲げにくくモチベーションも下がりがちだとは思いますが、チャンスが来たときに自分のものにできる準備期間と違って、前向きに一緒に頑張っていきたい! 皆さんの人生が少しでも豊かになりますようお願いしています!」

自分との闘いといわれる空手の形は、スピードやパワーを得意とする選手や突きや蹴りの力や足のきれいさを得意とする選手など、人によって特徴が表れる。